

## 卒業論文・卒業研究の要旨

論文題目	ウィリアム・ヒューウェルの書評に見る 1830 年代イギリス科学におけるジェンダー
氏名	鶴岡大知
メジャー	科学コミュニケーション
マイナー	哲学
<p>(要旨)</p> <p>本論文は、1834 年に、<i>Quarterly Review</i> に掲載され scientist という用語の初出とされる William Whewell (1794-1866) による Mary Somerville (1780-1872) の著作 <i>On the Connexion of the Physical Sciences</i> 書評について、近年の研究による成果である書評のジェンダー的含意や Whewell と当時の科学コミュニティにおける男性たちの振る舞いについての研究の整理を行ったものである。</p> <p>第 1 章から第 3 章までは、当時のイギリス科学の状況についてまとめた。当時は「イギリス科学衰退論」が叫ばれる中、科学の振興を図ろうとする動きが見られた。その中で誕生したのが英国科学振興協 (BAAS) であった。Whewell はその事務局長や会長を務め直接的に科学の振興に関わった一人である。第 4 章では scientist の提案そのものについて扱った。この書評は当時匿名のものとして書かれたが、Todhunter による <i>William Whewell, D.D.</i> (1876) によって Whewell によるものと特定された。第 5 章ではそのジェンダー的な含意について述べた。特に Ellis による“Whewell, Gender and Science” (2024) で指摘される当時のジェントルマン社会の中での Whewell の振る舞いは、Scientist の登場とジェンダーの問題を扱う上で重要な指摘である。第 6 章では提案のその後について扱っている。1890 年代になっても scientist という言葉は一部から批判のやり玉に挙げられていた。結語では本研究の今後の展開として STS (科学技術社会論) 諸潮流との接続を述べ今後の研究の可能性を示した。</p> <p>英国を中心に諸外国では多数の研究がなされている William Whewell や 19 世紀イギリス科学についての研究は、意外にも日本での研究成果は少ない。Scientist という言葉が生み出された背景について、当時珍しかった女性の科学の担い手である Mary Somerville について、そのジェンダー的な含意も含め研究した成果は日本では乏しいため、その紹介を行った。</p> <p>本論文では海外の諸研究の紹介に留まってしまったが、今後は更なる一次資料の探索とその史的な解釈を通じて新たな研究成果を生み出していきたい。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>自然科学とその研究に従事する者たちをイギリス近代史の文脈で捉え、ジェンダーの視点から考察を試みる意欲的な研究の第一歩をまとめている。直接使用した参考文献にとどまらない広い読書量や、分野を横断しながらの自主的で多角的な学びを考えると、今後の大学院進学後のさらなる研究の発展が期待される。学内外の自然科学・人文科学・社会科学の教員に指導を求めながら、早くから抱いていた関心テーマの考察を深めてきた姿勢は、リベラルアーツ学群での理想的な学びの形のひとつであったと言えよう。</p>	